

無駄に無駄を重ねて川を殺す「徳山ダム導水路」

―河村市長の『方針転換』という愚に抗議する―

2月14日の河村たかし・名古屋市長の突然の「導水路事業容認への方針転換」に市民は驚いている。2009年5月、市長に就任したばかりの河村氏は、「撤退表明」をして、世間の耳目を集め、支持率も上昇した。徳山ダム導水路(木曽川水系連絡導水路)は、2009年から「凍結」となっており、2010年からの「ダム等再検証」で国が関与する事業としては唯一残っている。国は「再検証」を終えたいだろうし、起業者・水資源機構としては大型建設事業を早く本体着工にもっていききたいだろう。2009年の河村市長の「撤退表明」が、導水路事業を進めない重しになってきたことは確かである。

だがそれ以上に、徳山ダム導水路は、そもそも不要だから進まなかったのだ。名古屋市水道の需要は1970年代のピークから3分の2にまで減っており、1995年に運用を開始した長良川河口堰の水を使う予定も全くない。「都心回帰」で給水人口が増えても、節水と地下水利用のために水の需要は減り続けている。

徳山ダムの新規開発水は一滴も使われていない。「水余り」は長良川河口堰ですでに証明されていた。全村移転という重い事実があっても、徳山ダムは建設するべきでなかった。「導水路はいらない愛知の会」が愛知県に「導水路事業はやめるように」と要請に行ったときの愛知県の担当者の答えは「徳山ダムができちゃったから(導水路を造るしかない)」であった。

要らないものを造ってしまった失敗を、失敗としてきちんと認め、過ちを繰り返さない。「損切り」を断行するしかないのだ。それができなければ、いつまでも高度成長期の政策にしがみつき、無駄に無駄を重ねて、社会全体を疲弊させることにしかならない。最近の建設費増額の動向から事業費が1000億円をはるかに超えることは明白である。次世代に大きな負担をかぶせることは許されない。

今回の河村市長の「新しい用途」なるものも、苦し紛れの単なる思いつきとしか考えられない。

「①安心安全なおいしい水」…名古屋市水道局の水が「日本一うみやあ」というのが河村市長のかねてからの自慢だったはずである。導水路からの水がそれに勝るといえる話は理解できない。「②流域の治水」…洪水対策で上流ダムが事前放流した後、もし雨が降らないで「ダムが空になったら！」という筋書きによるものだが、国交省のダム管理能力を信用しない見過ごせない発想だ。また名古屋市には十分な自流水利権があり、平成6年の大洪水で水源開発ダムが空になっても断水はなかった。水道需要は当時より大幅に減っている。奇妙なリスク論で市民を惑わすべきではない。「③堀川の再生」…この話は2009年にもあったが、貴重な水資源の利用として本筋のテーマにされるべきではない。

河村市長が言う「苦渋の決断」も、つまるところ、14年前の愛知県職員の「(ダムが)できちゃったから」という発言に追従したものに過ぎないとしか言ようがない。さすれば、2009年の「撤退表明」は人気取りの思いつき、口から出任せであったということか。

計画によれば名古屋市工業用水の水源取水の目的で徳山ダム導水路を通った水が、途中一部が長良川に放流される。「鵜飼場」直上流で放流されることに、岐阜市民は川の環境悪化と世界農業遺産「清流長良川の鮎」が蔑ろにされることに大きな不安と反対の声を上げている。名古屋市工業用水のために長良川を殺すのは許されない。

河村・名古屋市長が今しなければならぬことは「導水路撤退の行政手続き」である。

導水路建設容認という「方針転換」の愚に強く抗議する。

2023年2月16日

導水路はいらない！愛知の会
長良川市民学習会
徳山ダム建設中止を求める会